

大河の一滴

映画文学人生論

原作：五木寛之 (1998) 「幻冬舎」 原案：五木寛之
監督：神山征二郎 (2001) 脚本：新藤兼人
出演：小椋雪子 安田成美 撮影：浜田毅
榎本昌治 渡部篤郎 音楽：加古隆
小椋伸一郎 三国連太郎
川村亜美 南野洋子 ニコライ ナカリャコフ

私たちの生は、大河の流れの一滴にすぎない

五木寛之原作の映画『大河の一滴』を観た。原作は小説でも戯曲でもない。要するに、「私たちの生は、大河の流れの一滴にすぎない」という思想を軽く書きながしただけのエッセイだ。

この思想には東洋の無常感がこめられている。「逝（ゆ）く者は斯（か）くの如きか。昼夜を舍（お）かず」（孔子）。「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず」（鴨長明）。そして、親鸞の自然法爾（じねんほうに）も夏目漱石の則天去私もたぶんそのような感覚なのだろうと、五木寛之はいう。

まったくその通り。私もそのような感覚になじんでいる。まさか、それが映画になるとは思わなかったが、神山征二郎監督の映画は、原案をつくったのが五木寛之で、やはり大河の一滴の物語になっている。

主人公の雪子（安田成美）は金沢から上京して友人の亜美（南野陽子）と輸入雑貨店を営むが、亜美が不実な男に店の資金を貢いだことが原因で、倒産し、亜美は自殺する。

「私はこれまでに二度、自殺を考えたことがある」という原作の書き出しに基づいているのかもしれない。「人間はだれでも本当は死と隣り合わせで生きている。自殺、などというものも、特別に異常なことではなく、手をのばせばすぐとどく



大河の一滴

映画文学人生論

ところにある世界なのではあるまいか」。

九州のある県の教育委員会が小学校一年生から高等学校三年生までの児童や生徒を対象にしてアンケートをとった結果によれば、小学校一年生の約十パーセント近く、小学校六年生の三十パーセント以上、高校三年生の五十パーセント以上が、「自殺を一度は考えたことがある」と答えた。

また、警察庁が発表した平成八年度の日本国内の自殺者が二万三千百四人という数字にショックを受けたと五木寛之は書いているが、本書が発行された平成九年の自殺者数は三万二千八百六十三人に急増した。

雪子の父親（三国連太郎）はガンで死ぬ。若いころは文学に志を抱いていたが、志をあきらめ、地方の郵便局長として一生をすごした。わがまま娘を育てるために働き続けたような生涯ともいえるが、そもそも現実の人生は決して楽しいだけのものではない。人生とは重い荷物を背負って遠い道のりを歩いていくようなものだ。

雪子はロシア人のトランペット奏者ニコライに恋をし、わざわざロシアまで逢いに行ったが、ニコライは恋人と暮らしていることがわかる。しかし、雪子は自殺などしない。幼なじみの昌治（渡部篤郎）という都合のいい男が周囲にいる。大河の一滴を次世代に伝えることはできそうだ。

一滴が二滴となりて水ぬるむ